

土成丸山古墳調査報告

天羽利夫・岡山真知子・武藏美和

はじめに

ここに報告する土成丸山古墳は、徳島県博物館が「徳島の前期古墳研究」のテーマにもとづき調査した遺跡である。

当館では、調査研究と展示資料の充実を目的として遺跡調査に取り組んできた。当館が遺跡調査を開始したのは、1971年3月の県指定史跡宝幢寺古墳（前方後円墳）からである。この調査を契機に、国及び県史跡に指定されている古墳や学術上または保存上重要と考えられる古墳に主眼をおき、墳丘や石室の実測調査を毎年実施してきた。

宝幢寺古墳以降は「徳島の後期古墳研究」をテーマに、主として横穴式石室の調査に取り組んできた。この一連の調査により、徳島県内の横穴式石室に関する重要な問題はかなり把握できたと考えられる。

このテーマをさらに進展させるために、1979年度から「徳島の前期古墳研究」をテーマに遺跡調査を実施することになった。気延山古墳群の4基の古墳の調査を終え、懸案であった土成丸山古墳の調査を実施することにした。土成丸山古墳は、県下で数少ない周濠をもつ古墳であるが、調査が実施されたことがなく、規模・年代等不明な点が多かった。そこで、墳丘の地形測量を実施して、規模だけでも明らかにしておこうとのねらいで、今回の調査となった。

土成丸山古墳調査に際して、土成町・土成町教育委員会・同町文化財保護審議会をはじめ土地所有者の方々に多大なご尽力、ご指導を賜わった。特に文化財保護審議委員の村尾耕炳氏には一方ならぬお世話をいただいた。また、土成町有線テレビには町民の方々への周知等でご尽力いただいた。なお、本稿執筆にあたり、徳島県教育委員会文化課の菅原康夫氏に貴重な航空写真を提供していただいた。特記して深く感謝したい。

遺跡名	町史跡 土成丸山古墳
所在地	板野郡土成町高尾字熊ノ庄120番地（町有地）
調査期間	1984年3月6日～20日
調査主体	徳島県博物館
調査主任	主任学芸員 天羽利夫（当時）
調査協力	土成町教育委員会・土成町文化財保護審議会・徳島考古学研究グループ・土成町老人福祉センター・熊谷寺・土地所有者（鈴田重忠・和田信夫・安田茂・吉田久吉）
調査参加者	岡山真知子・小林勝美・河崎敏之・株木彰・辻佳伸・藏本晋司・武藏美和・大塚一志・影山輝美・下田順一・新孝一・多田寿一（順不同）

調査一覧

- 1 1971年3月 県指定 宝幢寺古墳 鳴門市大麻町池谷字勝明谷11の1
- 2 1971年8月 穴不動古墳 徳島市名東町1丁目
- 3 1972年2月 県指定 矢野の横穴式古墳 徳島市国府町西矢野山林39
- 4 1972年8月 観音山古墳 那賀郡羽ノ浦町中庄字千田池33
- 5 1973年2月 県指定 弁慶の岩窟 小松島市芝生町大嶽8の2
- 6 1973年3月 国指定 段ノ塚穴・棚塚 美馬郡美馬町坊僧368
- 7 1973年8月 国指定 段ノ塚穴・太鼓塚 美馬郡美馬町坊僧373
- 8 1975年3月 県指定 北岡西古墳 阿波郡阿波町北岡74の2
- 9 1976年3月 県指定 北岡東古墳 阿波郡阿波町北岡252の2
- 10 1976年8月 忌部山2号墳 麻植郡山川町山崎字忌部山123
- 11 1977年8月 忌部山1号墳 "
- 12 1978年8月 忌部山5号墳 "
- 13 1980年3月 曾我氏神社1号墳 名西郡石井町城ノ内字前山
- 14 1980年8月 曾我氏神社2号墳 "
- 15 1982年3月 長谷古墳 名西郡神山町阿野字長谷672
- 16 1983年3月 山ノ神古墳 名西郡石井町石井2429番地, 同西南の2428-2番地
- 17 1984年3月 土成丸山古墳 板野郡土成町熊ノ庄120番地
- 18 1984年8月 若杉山遺跡 阿南市水井町奥田42番地の9, 11
- 19 1985年8月 若杉山遺跡 "
- 20 1986年8月 若杉山遺跡 "

(なお発掘調査は10~15, 18~20で, それ以外はすべて測量・実測調査)

報告文献

- 1 立花博「遺跡調査概要—宝幢寺古墳の実測」『徳島県博物館報』12号 1971.7
- 2 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相—その1—」『徳島県博物館紀要』第4集 1973.3 (No. 2~6までの調査報告)
- 3 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相—その2—」『徳島県博物館紀要』第8集 1977.3 (No. 6~9までの調査報告)
- 4 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978.3 (No.10~12の調査概要)
- 5 天羽利夫・岡山真知子「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集 1982.3 (No. 13, 14の調査報告)
- 6 天羽利夫・岡山真知子・阿部里司・林慎二・多田寿一『忌部山古墳群』徳島県博物館 1983.3 (No.10~12の調査報告)

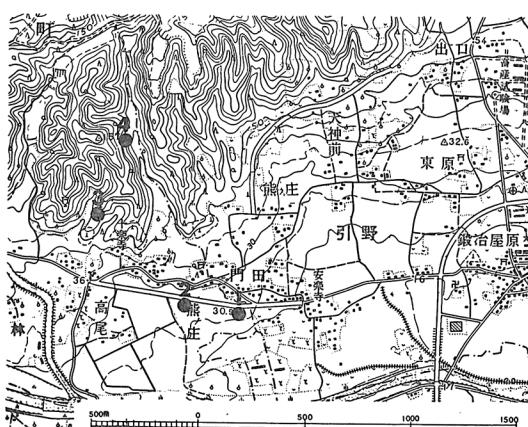
- 7 天羽利夫・岡山真知子・宮本敬子・高橋正則「長谷古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第15集 1984.3 (No.15の調査報告)
- 8 天羽利夫・岡山真知子「山ノ神古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第17集 1986.3 (No.16の調査報告)
- 9 岡山真知子・阿部里司・武藏美和・絹川一徳・三宅良明・大塚一志『若杉山遺跡発掘調査概報一昭和60年度一』1986.3 (No.19の調査報告)

1 土成丸山古墳と周辺の遺跡

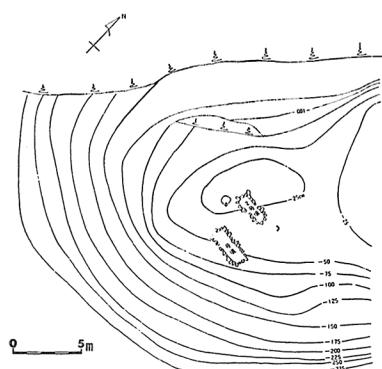
土成丸山古墳は、土成町の東端、上板町との町境に位置する。吉野川の支流、宮川内谷川の扇状地の扇端部にあたる。平地に築かれた周濠をもつ古墳で、現在のところ県下では渋野丸山古墳と2つしか該当しない。現在、周濠部は水田や牧草地として利用されており、用水路の改修などでかなり原状が変更されている。墳丘部は、一部墓地などに利用されているが、灌木等でおおわれ、比較的良好な保存状況である。

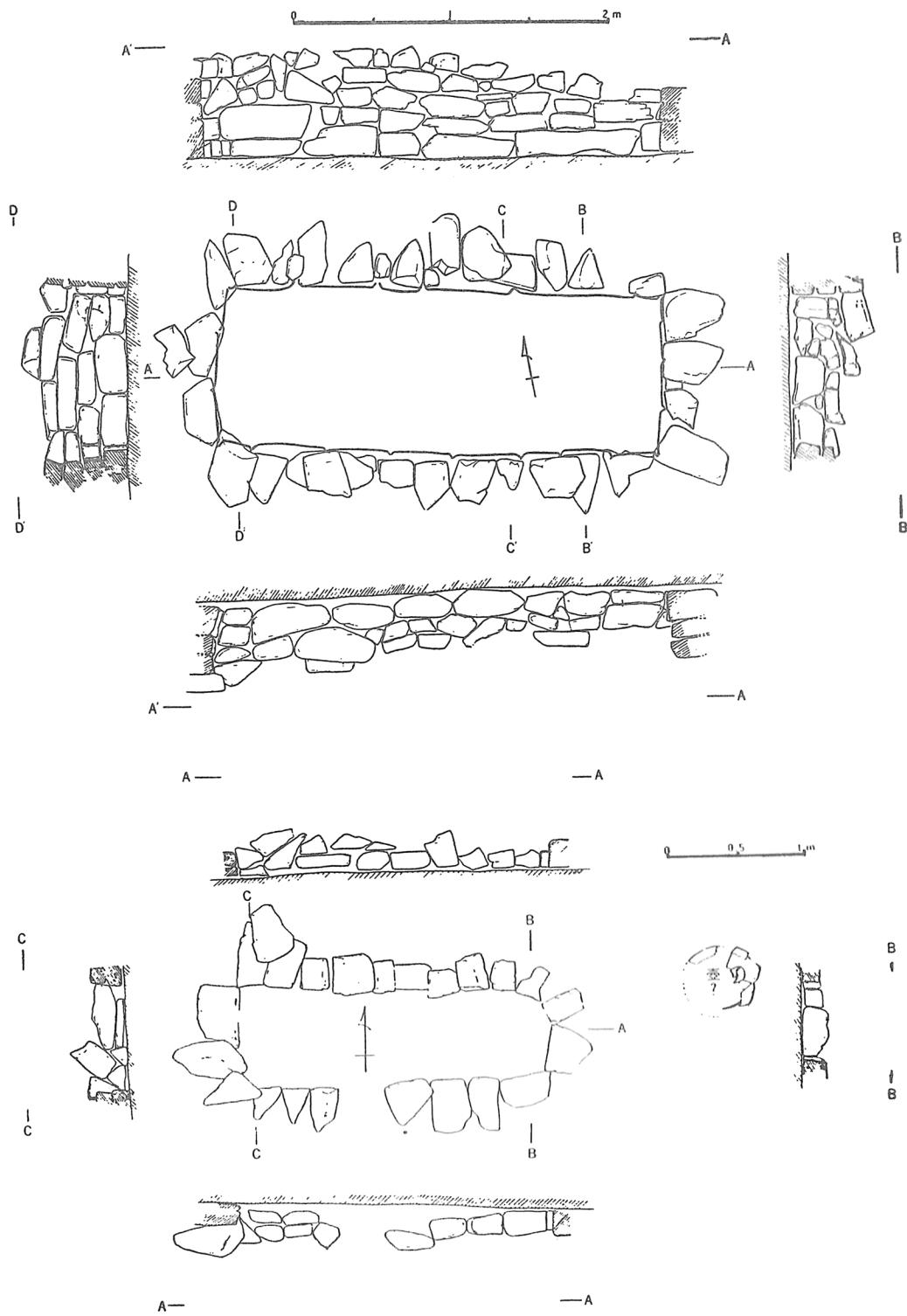
土成町は吉野川中流域の北岸にあり、河岸段丘がよく発達している。このよく発達した河岸段丘上やその間にみられる扇状地は、旧石器時代遺跡の宝庫である。特に宮川内谷川流域に形成された扇状地には有数の遺跡が展開している。徳島県の拠点的遺跡である椎ヶ丸遺跡をはじめ、宮川内遺跡・宮ノ尾遺跡などである。巨視的には、サヌカイトのナイフ形石器を主体とするが、瀬戸内技法・国府型ナイフの系統と背面が複数の面からなる剥片・ナイフの系統という2つの剥片技術の混在する石器群からなっており、注目される。^{註(4)}

最近の開発に伴う発掘調査によって弥生時代の遺跡が新たに発見された。土成工業団地建設に伴う北原遺跡がそれで、弥生時代の土塙などが検出された。^{註(5)}また、吉野川北岸農業用水工事に伴った大木峰延遺跡の調査でも炉跡が検出された。なお、この遺跡は奈良・平安時代から室町時代を中心とした遺跡である。^{註(6)}



第1図 丸山古墳の位置 (1:25,000『大寺』)
 1 丸山古墳 2 熊ノ庄古墳 3 十楽寺山古墳
 4 安楽寺址





第3図 十楽寺山古墳 石室実測図 (『土成町史』)

古墳は数多くあったらしいが、現状で確認できるのは数基しかない。土成丸山古墳の陪冢とも考えられるのが熊ノ庄古墳（第1図 No. 2）である。小さな円墳であったらしいが現存しない。また約700m西に四国靈場七番札所十楽寺があり、その裏山に十楽寺山古墳（第1図 No. 3）がある。十楽寺山古墳は径約15mの円墳で、2つの竪穴式石室を内部主体とする。いずれも砂岩の自然石で構築されている。南の1号石室は、全長2.83m・幅（東端）97cm・（西端）92cm・現在高67cmを測る。1号石室の北3mに2号石室がある。主軸は平行で、墳丘の最頂部に位置する。長さ2.27m・幅（東端）65cm・（西端）70cmを測る。2号石室の1m東の地点に径50cm、深さ20cmの掘り込みがあり、そこに埴輪質の土器片が付着していた。壺棺の可能性が強い。石室内からは青銅片や鉄器の小破片が出土しただけで、他に副葬品は認められない。2号墳→1号墳という築造順序が考えられている。^{註(7)}

また、現存しないが西谷に西谷古墳があった。銅鏡2面・勾玉3個・管玉22個・鉄斧3・刀剣3が出土した。鏡は、変形獸帶鏡と神獸鏡で、勾玉に丁字頭勾玉が1点含まれている。^{註(8)}

向山の丘陵には、向山古墳群が展開する。1号墳（岩屋古墳）は、横穴式石室を内部主体とする。砂岩を石材とし、玄室の長さ3.55m・幅1.75m・高さ2.1mを測る。羨道は残存部で幅1.5mである。2号墳は、径8m・高さ2mの円墳である。^{註(9)}

御所神社裏山には、御所神社古墳がある。昭和53年度の徳島県教育委員会の調査で前方後方墳と推定された。全長75m・前方部幅30m・後方部長さ40mを測るが、内部主体・出土品ともに不明である。^{註(10)}

吉田の姫塚古墳は、小円墳で須恵器杯が出土している。遊塚古墳からは、鉄刀が出土した。また、南原の穴薬師古墳は、径7m・高さ約2mで横穴式石室を内部主体とする。玄室は長さ1.8m・幅1.75m・高さ1.8mと立方体を呈する。羨道は、現存で長さ3.75m・幅1.5mを測る。側壁には砂岩・天井石には緑泥片岩を使用している。土成小学校西の赤田山にも古墳がかつて存在し、玉類が伝えられている。^{註(11)}

この他にも村誌などをみると、かなりの数あったらしいが、現在では地点すらわからない状況である。

平城宮から、「阿波国阿波郡秋月郷庸米物部 小龍一俵」と記された木簡が出土している。これから、奈良時代に阿波国阿波郡に秋月郷が存在していたことがわかる。また、『和名抄』にも「秋月郷」が記されている。^{註(12)}^{註(13)}

平安時代には、安楽寺址（第1図 No. 4）があり、単弁蓮華文の軒丸瓦、連珠文の軒平瓦が出土している。また、十楽寺西北の西谷には、堂が原があり、布目瓦が散布している。また、火葬墓も土成町で2ヵ所確認され、藏骨器が残されている。^{註(14)}

室町時代には、細川氏の活躍した拠点のおかれた地域で、特に秋月城は現在も残されている。秋月城周辺には、安国寺址、蛭子瓦窯などの遺跡も集中している。また、水瓶や古丹波焼の藏骨器も出土しており、一大中心地であったことがわかる。^{註(15)}

註(1) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣 1976年, 高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27 旧石器文化談話会 1983年, 高橋正則「板野郡土成町椎ヶ丸遺跡の破壊」『徳島考古』第2号 1985年

註(2) 天羽利夫「徳島県の遺跡」(前掲書), 高橋正則「徳島県宮川内谷川流域の遺跡」『旧石器考古学』 31

旧石器文化談話会 1985年

註(3) 註(2)に同じ

註(4) 高橋正則「徳島県宮川内谷川流域の遺跡」(前掲書)

註(5) 徳島県教育委員会文化課『北原遺跡現地説明会資料』 1986年

註(6) 『徳島県文化財だより』第18号 徳島県教育委員会他 1986年

註(7) 立花博「原始社会」『土成町史』上巻 1975年

註(8) 立花博「原始社会」(前掲書)

註(9) 徳島県教育委員会文化課『徳島県文化財調査概報』昭和53年度 1980年, 小林勝美「徳島県内の前方後方墳の研究」『徳島県立城東高等学校研究紀要』第6号 1981年

註(10) 立花博「原始社会」(前掲書)

註(11) 立花博「原始社会」(前掲書)

註(12) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡』I 1969年

註(13) 池邊彌『和名類聚抄郷名考証』吉川弘文館 1970年

註(14) 立花博「古代社会」『土成町史』上巻(前掲書)

註(15) 小林勝美「瓦窯の研究」『研究紀要(第5号)徳島県立城東高等学校 1980年』

2 調査の概要

1) 調査の経過

土成丸山古墳は、平地に築造された周濠をもつ円墳で、昭和46年3月10日町史跡に指定されている。『板野郡誌』^{註(1)}には「高さ八間周囲二百間」,『御所村誌』^{註(2)}に「赤白二種の埴輪円筒をもち、円筒以外にも種々なものがあり、直径廿二間高さ約四間周囲に幅五間位溝を有せし」との記載がある。『土成町史』^{註(3)}では、墳丘基底約30m・高さ約6m・幅約15mの周濠があり、二段構築と述べられている。しかし、一度も本格的に調査されたことがなく、規模は推測の域をでていない。“ここを掘って腹痛になった”という伝説が残されており、墳丘頂部に盗掘塹が2.5m×2mほど認められるが、内部主体については不明である。また、周濠についても、用水路の改修工事等によりかなり原状が変更されてしまっている。そこで、墳丘および周濠の規模を明らかにするために、測量調査を実施することにした。

まず、現在確認できる周濠の周囲にA～Kの11点の基点を設定した第1次トラバースを組んだ。次に墳丘内に頂部のP.Oを中心いて1から11まで12点を設定し、第2次トラバースとした。いずれも閉合トラバースである。また、第1次、第2次も東・西半分でそれぞれ閉合させ、基点の誤差修正を行った。その上で、基点から平板測量を実施していった。原図は、縮尺100分の1、25cmコンタで描いた可能な限り広い面積を測量することとしたので、18枚もの図となり、図面編纂に手間どった。

墳丘裾で埴輪片がかなり採集できた。年代決定上重要な資料であるので、整理して章末に紹介した。

註(1) 徳島県板野郡教育会『板野郡誌』 1926年

註(2) 徳島県板野郡御所村役場『御所村誌』 1929年

註(3) 立花博「原始社会」『土成町史』上巻(前掲書)

調査日誌抄

3月6日（火） 曇のち雨

墳丘の草刈，伐採，ポイントの設定

3月7日（水） 曇のち晴

墳丘の草刈り，伐採，ポイントの設定

3月8日（木） 晴

墳丘の草刈り，墳丘頂部の測量（30.75m～30.0m），埴輪片採集

3月9日（金） 晴

墳丘頂部の測量（29.75m～28.75m），トラバース杭設定，配点図作成，埴輪片採集

3月10日（土） 雨のち曇

トラバース測距，測高

3月11日（日） 晴

トラバース測距，墳丘部測量（28.75m～5m）

3月12日（月） 晴のち雨

墳丘部測量（28.5m～完成），P.Cから周濠西側地形測量

3月13日（火） 曇

P.Cからの測量，P.Gからの測量

3月14日（水） 雪のち曇

埴輪の実測，段ノ塚穴・願勝寺の見学

3月15日（木） 曇のち雨

南側周濠，東側周濠地形測量，

3月16日（金） 曇

墳丘北斜面，西斜面，裾部を地形測量

3月17日（土） 晴

P.Eより南西部の溝および池の北辺・西辺および西にのびるあぜの地形測量

P.Kより墳丘北側の県道および県道北側の地形測量

3月18日（日） 晴

P.D～P.EおよびP.12からの測量終了，P.F～P.J間のレベル記入

現地説明会（60名参加），P.Kより県道北側の地形測量

3月19日（月） 雪

周濠北西部分の単点測定，補足調査，測量図の確認

3月20日（火） 晴

補足調査，測量完成

2) 調査結果

調査の結果、周濠をもつ二段築成の円墳であることが確認できた。

最高点は、30.86mである。墳丘裾部は、東で24.92m、西で24.399m、南で24.394m、北で25.77mであり、北が1~1.4mほど高くなっている。これは自然の地形の起伏と考えられる。墳丘の裾は現状で東西43m、南北39m、高さ6.5mを測る。西側はかなりの土砂の流れが認められ、中心から同心円を描くと、径40mの円墳が復元できる。

等高線をよく見ると、27.0m前後で間隔が疎になり、28.0m前後から間隔が密になる。疎になるのが、東では27.25mから27.75mまで、西では26.5mから27.5mまで、南では27.25mから27.75mまで、北では27.75mから29.5mまでである。裾と同じく、1~2mほど北が高くなっている。この疎となる部分が1段目のテラス部分と考えられる。この部分で幅6mを測る。そして、密になり始める27.5mから27.75mが2段目の築成が始まる地点である。ここで、径22m、高さ約3.3mとなる。

次に周濠をみてみたい。北西の牧草地で幅11~13mを測る。牧草地内の起伏はあまりないが、墳丘側が10cmほど高い地点がある。南西から南の水田では幅11~15mを測り、水田で水田内の高低差はほとんどなく、平坦である。南東から東にかけての水田は、用水路の改修で原形をとどめていないが、おそらく、幅15m前後の周濠がめぐっていたと考えられる。北東の周濠も同様で、幅15mである。この範囲を考えて、墳丘中心から同心円を描くと幅15mでうまく合致する。こう考えると、周濠を含めた大きさは径70mである。東の畦畔や南の池が原状をとどめている可能性がある。そこまで含めると、幅25mの周濠がめぐる径90mの大円墳が復元できる。しかし、これにはかなり無理があり、前述の70mが妥当であろう。

周辺の地形をみてみると、県道をはさんだ北は、北へいくに従って1段ずつ高くなり、27m前後となる。北西も同じである。西は、25.7m前後と北西の牧草地内とよく似ているが、水田面よりは1段高くなる。また、南は南へいくに従って下がり、23m前後となる。東も下がっていき、24.4m前後である。つまり、北西から南東へ下がる自然の傾斜面があり、その中央に土成丸山古墳が築造されたと言える。しかも、二段築成された墳丘の一段目と二段目の径が1:2、同じく高さは1:1となる。また、周濠の幅と墳丘の径の比が3:4となる。土成丸山古墳は前方後円墳にも匹敵する設計思想で設計された古墳と言えよう。

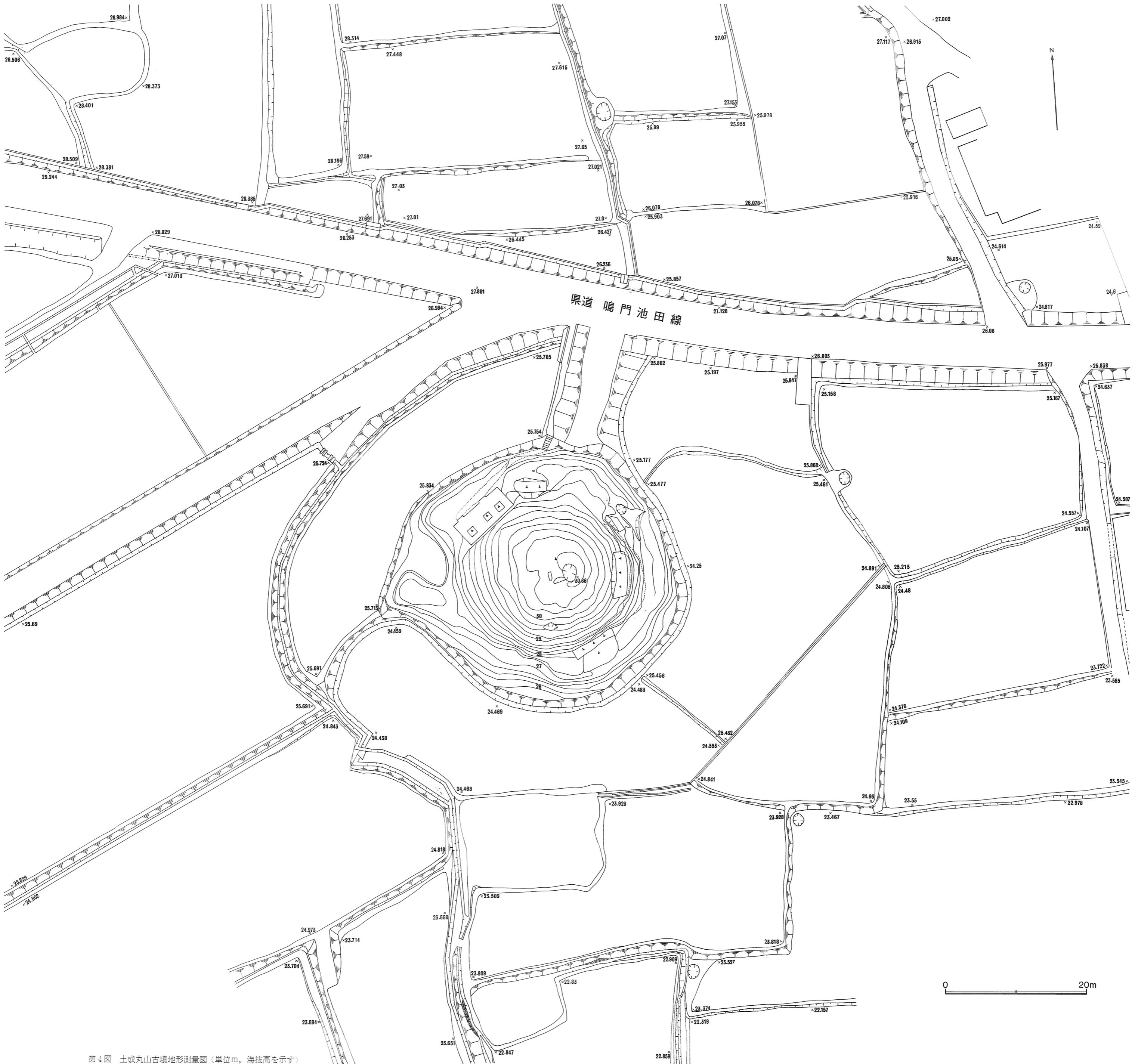
3) 採集埴輪の整理

今回の調査に伴い、埴輪片を30点余り表面採集した。良好な状態のものは少ないが、特徴的なものをとりあげて、報告したい。

埴輪は墳丘テラス面、墳裾、周濠部から採集され、形象埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪に分けられる。

1 形象埴輪 (第7図1, 2)

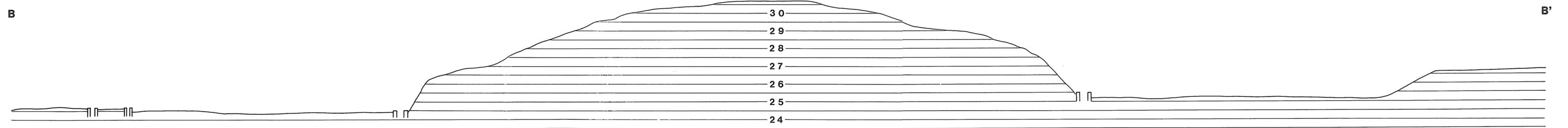
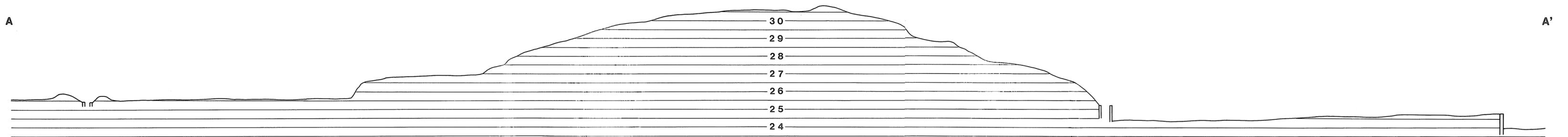
1は、胎土に5mmの大いな小岩粒を含み、焼成はやや良で、淡褐色、断面黒色を呈する。摩滅が著しいが、表面には鋸歯状にヘラ書きを施した後、上部に一条の沈線を施したものであろう。おそらく、盾か兜形埴輪と考えられる。



第4図 土成丸山古墳地形測量図（単位m、海拔高を示す）



第5図 土成丸山古墳墳丘測量図（単位m, 海抜高を示す）



第6図 土成丸山古墳墳丘断面図（単位m、海拔高を示す）

0 10m

2は、胎土に石英粒を含む2mm大の小岩粒を多く含み、焼成はやや良で、暗褐色、断面黒色を呈する。表面に凸帯の剥離痕が認められるほかは、摩滅のため調整は不明である。方形透孔が認められ、器壁が曲面を描かないことから、家形埴輪と思われる。

他に、馬形埴輪などの脚部かと考えられる細片も採集されている。

2 朝顔形埴輪 (第7図3)

3の頸部破片のみで、胎土に石英粒を含む5mm大の小岩粒を多く含み、焼成はやや良で、黄褐色、断面黒色を呈する。頸部に断面三角形の凸帯を有する。外面は、凸帯貼り付けの際のナデ調整のほかは摩滅のため不明で、内面は、頸部の上下に稜を有するように強くナデられている。また、粘土紐の積み方が左右異なっている。

3 円筒埴輪 (第7図4~7, A, B)

円筒埴輪は、採集された埴輪の大多数を占める。

4は、胎土に1mm大の砂粒を含み密で、焼成は良好である。器厚1cmを測り、淡褐色で、断面台形の凸帯を有する。外面は2次B種ヨコハケ、内面はナデが施されている。

5は、胎土に石英粒を含む5mm大の小岩粒を多く含み、焼成はやや良である。径22.7cm、器厚1cmを測り、褐色で、断面台形の凸帯を有する。摩滅が著しいが、外面は1次タテハケのみ、内面はナデと思われる。

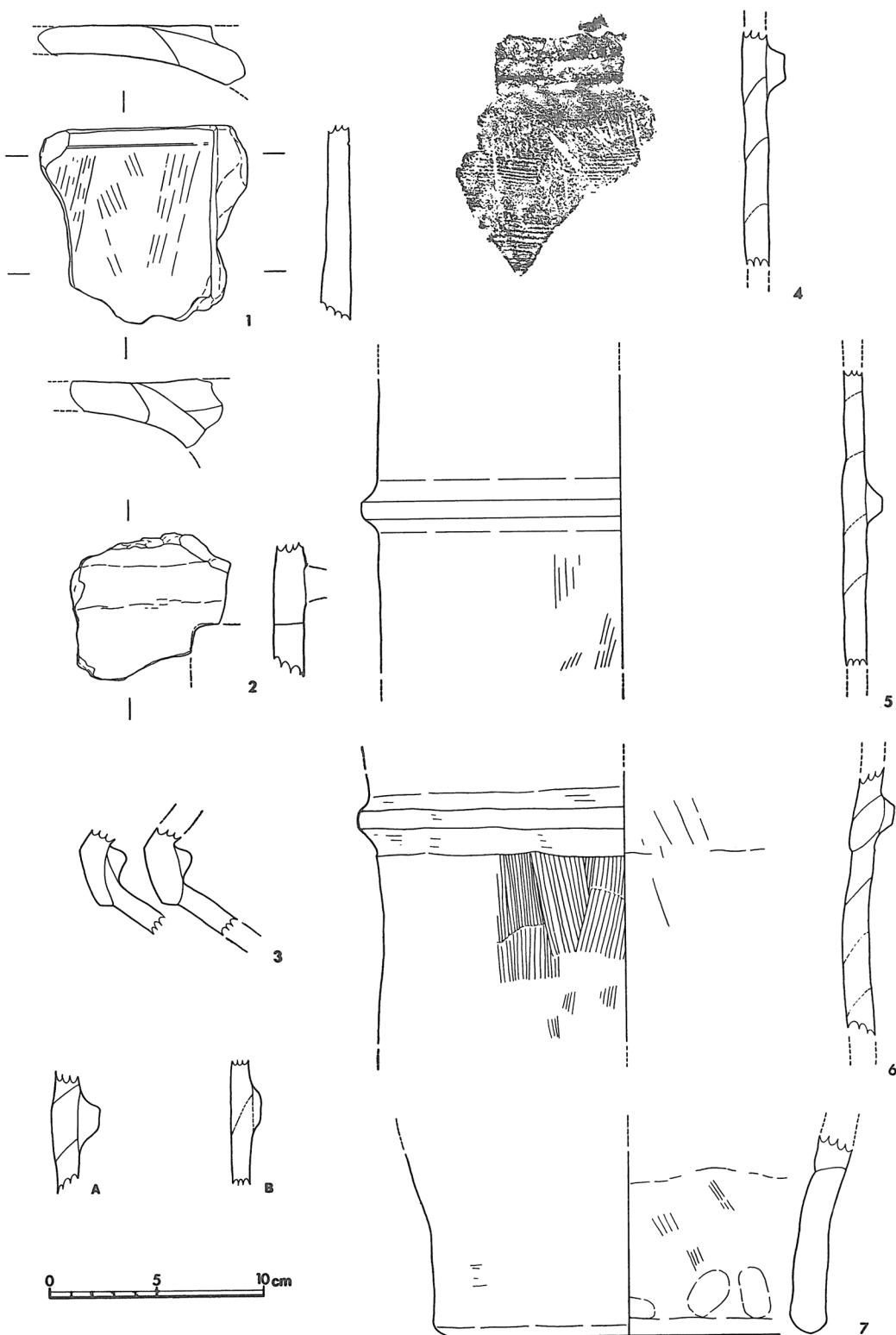
6は、胎土に石英粒を含む2~4mm大の小岩粒を含み、焼成は良好である。径23cm、器厚1.2cmを測り、淡黄褐色で、断面台形の凸帯を有する。外面は1cm当たり6~8条の一次タテハケのみ、内面は、斜位のナデが施されている。

7は基部片で、胎土に石英粒を含む3mm~1cm大の小岩粒を含み、焼成はやや良である。径18.4cm、器厚1.6~2.5cmを測り、上方に向かい開き気味である。外面褐色、内面暗褐色で、基部は板づくりである。摩滅が著しいが、外面はヨコハケ、内面は下部に指押さえ、上部にナナメハケが施されている。

これらを含め円筒埴輪の特徴をあげると次のようになる。1 褐色の焼成のよくないものと淡黄褐色の焼成のよいものとがある。2 調整は外面が2次B種ヨコハケあるいは1次タテハケのみ、内面がナデ、ハケである。3 透孔の形状は不明である。4 凸帯は断面台形のしっかりしたもの(第7図A)と突出度の低いもの(B)がある。5 口縁端部は平坦な面をもつ。6 黒斑、基部調整は認められない。

以上のうち、B種ヨコハケ、凸帯(A)、無黒斑、基部調整のない点は川西編年のIV期、1次タテハケのみ、凸帯(B)はV期に相当する。全体的に考えて、本古墳の円筒埴輪はIV期の終末段階からV期にかけての時期だと考えられる。県内での埴輪の比較資料が不足していることと、本古墳の内部構造、遺物が不明であることから、積極的に実年代を与えることはできないが、川西編年によれば、5世紀後半から末にかけての頃をみて差し支えないだろう。

註(1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978年



第7図 墳輪実測図

3 考 索

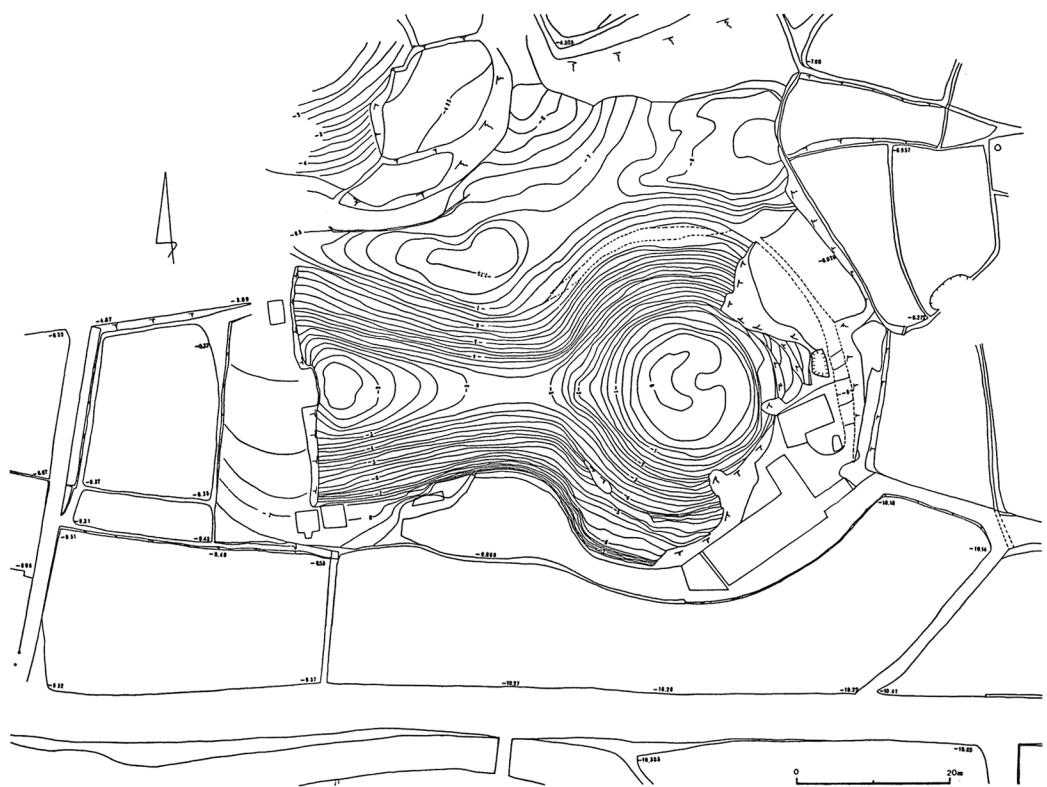
土成丸山古墳は、内部主体は不明であるが、採集した埴輪片から川西編年のIV期からV期にあたり、^{註(1)}5世紀後半から末の築造と考えられる。この時期は、県下の古墳築造の少ない時期である。特に県下の中心的古墳群である気延山古墳群では空白となる時期である。

この時期に造営された代表的な古墳は、天河別神社古墳群である。4号墳の前方部裾に幅2mの溝がめぐり、その中から5世紀後半の器台が出土している。また、すぐ東の宝幢寺3号墳は径11.3m、^{註(2)}高さ50cmの円墳で、出土品などから5世紀後半と考えられている。また、眉山の南の恵解山古墳群も^{註(3)}1・2・8号古墳は、この時期に該当すると考えられる。

4世紀後半に前方後円墳などが造営され、5世紀中葉の浩野丸山古墳でその頂点を迎える。

渋野丸山古墳は、1970年の徳島考古学研究グループでの調査で規模が明らかになった。それによると、全長80m（復原推定長90m）、前方部幅32m、長さ33m、高さ6m、くびれ部幅21m、後円部径45m、高さ10mの3段築成の前方後円墳で、南から東にかけて幅17mの周濠が回る。土成丸山古墳は、これを一回り小さくした規模である。註(4)

土成丸山古墳より1世紀ほど下るが、段ノ塚穴（太鼓塚）と比較してみたい。太鼓塚は、東西37m、南北33m、高さ10mの円墳である。高さではやや劣るが、墳丘はこれを1回り大きくした形である。
註(5)



第8図 渋野丸山古墳実測図（『徳島考古』第2号）

渋野丸山古墳、土成丸山古墳、段ノ塚穴（太鼓塚）の墳丘の大きさを比較してみると第9図のようになる。

40mという長さは、徳島県の前方後円墳の最も一般的な全長を示す。周濠部分も含めて70mというと、渋野丸山古墳に次ぐ規模となる。しかも、このような比高差0mという平地の築造は数少ない。吉野川の氾濫原に築造された足代東原遺跡くらいである。足代東原遺跡は、1号墳が前方後円状の積石塚である。この1号墳を中心には46基以上の積石墓が集中した遺跡である。1号墳は、全長16.5m・後円部径11m・前方部長5.5m・前方部幅4m、高さ40cmという小規模の積石墓であり、庄内並行期に位置づけられている。
註(6)

以上から、土成丸山古墳は、渋野丸山古墳に後続して5世紀後半に築造された盟主の古墳である。この周辺には、宝幢寺古墳群、愛宕山古墳といった前方後円墳を中心とした古墳が4世紀後半に展開する。これに引き続いて、天河別神社古墳群が築造され、これとほぼ同時期に土成丸山古墳が築造されたといえる。

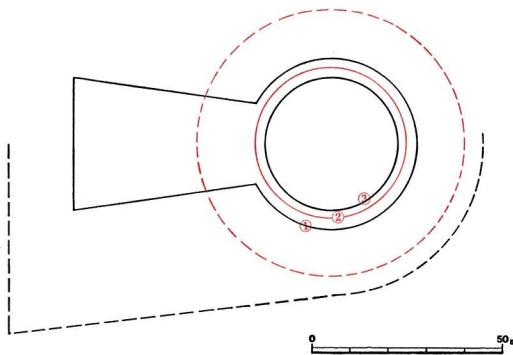
ところで、土成丸山古墳の立地する周辺地域は、阿波国造である「栗凡直」一族の濃密な分布地と推定される。

『続日本記』神護景雲元年条には、「阿波国板野名方阿波等三郡百姓言。己等姓。庚午年籍被記凡直。唯籍皆着費字。自此之後。評督凡直麻呂等披陳朝庭。改為栗凡直姓。己畢天平宝字二年編籍之日。追注凡費。情所不安。於是改栗凡直。」とある。

このことから、名方郡、板野郡、阿波郡といった地域に栗凡直姓が特に多かったことが理解できるが、名西郡石井町中王子神社に伝わる養老7年の阿波國造栗凡直弟臣墓碑銘や延喜2年の板野郡田上郷戸籍においても顕著である。なかでも、土成丸山古墳の周辺は、栗凡直一族の本貫地ではないかと推定される。

土成丸山古墳は、規模・年代からみて、国造栗凡直と直系の被葬者ではないかと考えられる。

阿波国の阿波郡の重要性は今後大いに検討すべき課題であるが、その鍵をこの土成丸山古墳は握っている。



第9図 ①渋野丸山古墳・②土成丸山古墳・③段ノ塚穴（太鼓塚）比較模式図

註(1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（前掲書）

註(2) 立花博・菅原康夫『天河別神社古墳群調査概報』徳島県教育委員会 1980年

註(3) 菅原康夫・河野雄次・林 健二『萩原墳墓群』 徳島県教育委員会 1983年

註(4) 徳島考古学研究グループ「渋野古墳群の研究」『徳島考古』第2号 1985年

註(5) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相一その2」『徳島県博物館紀要』第8集 1977年

註(6) 菅原康夫「徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報』35 1985年

註(7) 池邊 彌『和名類聚抄郷名考證』 吉川弘文館 1970年

註(8) 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978年



写真1 墳丘全景（東から見る）



写真2 墳丘遠景（西から見る）
手前の▼は消滅した態ノ庄古墳

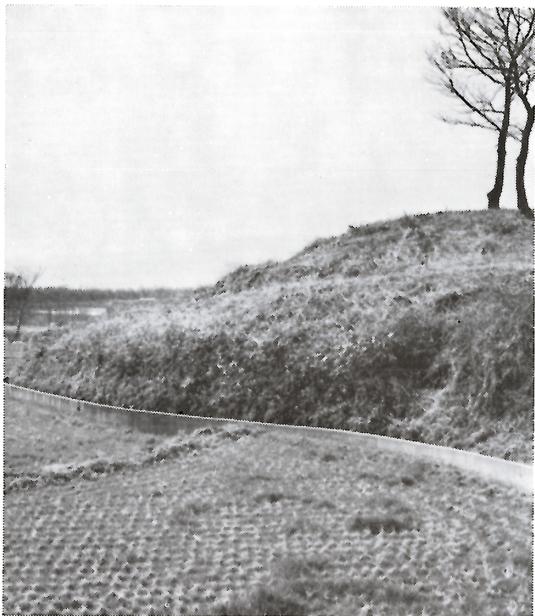


写真3 東側墳丘（北から見る）



写真4 西側墳丘（北から見る）



写真5
西側周濠（南から見る）



写真6
西側周濠（北から見る）



写真7
東から南にかけての周濠



写真8
西から南にかけての周濠